Priska Pytlik:
Okkultismus und Moderne. Ein kulturhistorisches Phänomen und seine Bedeutung für die Literatur um 1900.

熊谷　哲哉

オカルティズムとは、交霊術や精神の物質化（エクトプラズム）現象、心霊写真、などに代表される、人間精神の「知られざる、かくされた（ラテン語 occultus に由来）」一面について探ろうとする一つの文化現象である。従来オカルティズムは、伝統的な西洋神秘主義やカバラのようなユダヤ神秘主義、そしてシュタイナー的な人智学と混同されたり、または「幻想文学」という限られた範囲内で論じられるにとどまっており、文学研究の場では言及されることのあまりない、非合理な思想として片付けられることが多かったといえよう。しかしながら、近年、オカルティズムと世紀転換期文学の関係について、文化史的・精神史的、そして文学史的な関心が高まりつつあるのもまた事実である。

オカルティズムを文学や文化史と結びつけた著作としては、すでに 1993 年に、モニカ・フィックが『感覚世界と世界霊魂』〔Fick 1993〕において、19 世紀後半の一元論思想と科学的な心霊研究の関係、そしてリルケやムージル、ホーフマンスタールの文学作品への影響を論証している。また、おなじく 90 年代には、ストラスブール大学が独仏共同シンポジウムの記録として『神話と神秘主義とモデルネ』を出版している〔Baßler / Chatellier 1998〕。この論文集では、リンゼのようなすでに著名な研究者による文化史的な研究をはじめ、カンディンスキーの絵画への影響や、ミュンヘン宇宙論サークルとオカルティズムの関連など、文学や思想にとどまらない多方面にわたる論文が収められている。また、文化史の分野では、ザヴィツキが『死者とともに生きる』〔Sawicki 2002〕において、啓蒙主義以後から世紀転換期までのドイツ心霊主義の全体像を描き出すことに成功しているし、アメリカのトライテルは、ほぼ同じ時期を対象としながら、さらにオカルティズムの流行とその社会的影響についても論じている〔Treitel 2004〕。世紀転換期ドイツにおけるオカルティズムが注目を集める一つの要因として、その後の文化的状況への影響、すなわちナチズムとのつながりへの高い関心があるわけだが、このことについては、グッドリック - クラークが『ナチズムのオカルト的源泉』〔Goodrick-Clarke 2004〕において、グイード・フォン・リスト、およびランツ・フォン・リーベンフェルスという代表的なオカルティスト

を取り上げつつ詳細に論じている。近年の著作では、フランツ・ヴェゲナーがヒムラーのオカルティズムへの没入についてまとめている〔Wegener 2004〕。

以上のように昨今のオカルティズムをめぐる研究の活況について概観してきたが、本書『オカルティズムとモデルネ』は、このような先行研究に対してどのように独自の論を展開しているのだろうか。次に具体的に本書の内容について述べたい。

本書は4章で構成されているが、量的・内容的にみて大きく二つに分けることができよう。すなわち論の前提として、オカルティズムの歴史的背景、そして世紀転換期ドイツにおけるオカルティズムを論じた前半部、そして具体的に作家と作品を挙げ、オカルティズムの影響を読みとる後半部である。前半部の第2章においてピュトリクは、メスマーの動物磁気や、ライヒェンバッハのオド理論のような18世紀的なオカルティズムから、19世紀後半に飛躍的に発展した科学的／疑似科学的オカルティズムについてその概要を解説し、さらに代表的な論者とその業績についてまとめている。ここであげられているのは、ミュンヘンを中心に活躍した在野の哲学者カール・デュ・プレル、そしてその盟友であった神経科医アルベルト・フォン・シュレンク－ノッチングである。文学的・哲学的背景を持ったデュ・プレルは、夢とポエジーの分析を通じて、人間に詩的霊感を与えるのは人間精神の外にある何か（それは死者の魂でもあるし、世界を導く合目的性ともいえる）であると考えた。彼の思想は、雑誌『スフィンクス』を通じて広く知られ、リルケと書簡のやり取りをしたことから、その影響が論じられている。また、シュレンク－ノッチングは、神経科医として催眠術の実験を何度も行い、その際に起こる霊媒の身体的変化や精神の物質化現象について多くの著作を残した。シュレンク－ノッチングの名前はトーマス・マンやフロイトの著作に言及されているのを見ることができる。世紀転換期ドイツのオカルティズムにおいて、彼らふたりの及ぼした影響は計り知れない。

さらに第3章でピュトリクは、ベルリンとミュンヘンにおける文学的モデルネとオカルティズムの人的交流を明らかにしたうえで、シュラーフ、リルケ、トーマス・マン、デーブリーンらの作品とそこに見られるオカルティズムの影響について詳しく論証している。文学的モデルネとオカルティズムが結びつけたのは、一対一の単線的な影響関係だけではない。オカルティズムという共通の問題系を通じて、これまであまり並べて論じられることのなかった作家たちが、新たな連関を作り出すことになるのだ。

第3章の後半では、多くの頁をリルケとデュ・プレルの思想的・モチーフ的なつながりが問題となっている。ピュトリクの読みによれば、初期リルケがデュ・プレルおよびそのオカルティズムの思想から受けた影響は、のちの『マルテの手記』や『ドゥイノの悲歌』にいたるまで続いているというのだ。生と死の境界の喪失、あるいは世界内面空間における時間と空間の溶解といったリルケ的世界認識は、デュ・プレルの世界観と大いに類似点を持っている。問題は類似性の指

摘にとどまるものではない。第4章において筆者が述べるように、ポエジーが外界から、人間の合理的思考の外から与えられる、というデュ・プレルとリルケが考えたようなオカルティズムの言説は、テクストの生成における作者の地位を周辺へと追いやったといえる。それはロラン・バルトの言葉を待つまでもなく、モデルネ以降の文学における最も重要な問題を先取りするものであった。本書においてピュトリクは、世紀転換期から現代にいたるまで、われわれの文学理解を支配し続けているモデルネの諸問題に、新たな意味を付与することに成功している。たしかに、オカルティズムと同様に人間心理の外側（裏側）を探究した精神分析とオカルトとの影響など、論述の不十分な箇所もあるが、それはこの研究分野全体の課題でもある。少なくとも本書は、文学研究の新たな方法として、今後さらに注目を集めることになるだろう。

(Paderborn / München: Schöningh 2005)

参考文献

Baßler, Moritz / Chatellier, Hildegard (Hrsg.): *Mystik, Mystizismus und Moderne in Deutschland um 1900.* Strasbourg 1998.

Fick, Monika: *Sinnenwelt und Weltseele. Die psychophysische Monismus in der Literatur der Jahrhundertwende.* Tübingen 1993.

Goodrick-Clarke, Nicholas: *The Occult Roots of Nazism. Secret Aryan Cults and their Influence on Nazi Ideology.* London 2004.

Sawicki, Diethard: *Leben mit dem Toten. Geisterglauben und die Entstehung des Spiritismus in Deutschland 1770-1900.* Paderborn / München / Wien / Zürich 2002.

Treitel, Corinna: *A Science for the Soul. Occultism and the Genesis of the German Modern.* Baltimore / London 2004.

Wegener, Franz: Heinrich Himmler. *Deutscher Spiritismus, französischer Okkultismus und der Reichsführer SS.* Norderstedt 2004.